

一〇ノ七、多門院日記

出典 多門院日記（辻善之助編 三教書院）

解説 興福寺多門院英俊（二五二八年〜一五九六年）の日記を中心とする記で文明十年（二四七八年）から元和四年（二六一八年）の記事が記載されている。ここには山城と化した感のある笠置寺の姿が断片的にあらわれる。

応仁の乱が終わった（一四七七年）後も山城、大和においては守護大名たちの勢力争いが依然として続き、ここに木沢長政という笠置山に関係する次の役者が登場する。

木沢氏は代々河内守護畠山氏譜代の被官であった。長政は畠山義堯の守護代として河内の飯盛城を預けられていたが、享祿三年（一五三〇年）には細川晴元（応仁の乱の立役者勝元の曾孫）の被官となり、大和に信貴山城を造り山城笠置城を修復して河内、大和、山城の三国に勢威を振るった。

しかし、当時の細川晴元政権内部で三好長慶が台頭すると長政はこれと競い、天文十年（一五四一年）八月以降、摂津国衆の紛争への介入を巡って晴元、長慶と対立するにいたった。その頃山城守護代ともなっていた長政は同十月、ついに晴元政権に反旗をひるがえして京都を攻略せんとして虎視眈々としていたが、この時に笠置城は長政側の陣営の拠点となっていたのである。

木沢方の要塞となっていた笠置城の大將は「右近」といい、右近の甥は甲賀者であった。七〜八十人の守備の者を擁していたが、笠置城の弱点は水で、笠置城の落城は時間の問題と判断している。

同年十一月二十六日の朝、伊賀者が笠置城へ忍び込み坊舎に放火した。そして同二十八日に笠置城を巡って戦いがあり、木沢勢は城中から二手に分けて討って出て、攻め手三人余を討ち殺し伊賀の者は皆退散した。笠置城を攻めたのは大和土着の豪族筒井順昭である。これは細川晴元による長政への牽制策によるもので、城中に籠もっていた甲賀の者に對抗して筒井順昭は伊賀衆を使って城中に忍び込ませ、城に放火して戦を仕掛けたのである。

木沢長政が京都に迫ったことにより、山城守護の細川晴元は岩倉に退き、將軍足利義晴も近江、坂本に移る自体となったが、晴元側はすぐ体制を立て直し、翌天文十一年（一五四二年）長政を河内の太平寺において畠山、三好の軍勢が討ち取り、十年間におよぶ長政の権勢に終止符を打った。

長政亡き後、笠置城の砦がどうなったのか、記録はない。しかし天文十九年（一五五〇年）二月の条に「笠置八講青源房の代に出了」という記録があることからみれば、笠置寺がなお旧来からの法会を継続していたのは救いではある。

またさらに時代が下った天正三年（一五七五年）五月には奈良の僧たちが笠置山名物のツジを見るために来山している。この頃は信長が全国統一に向けて戦いを繰り広げていた

時で、信長の伊賀攻めも近づいていたが笠置山には平穩の時が過ぎていたのであろう。

原文

*天文一〇年（一五四二年）一月二十六日の条

今朝伊賀衆笠置城忍ヒ入テ少々坊舎放火、其外所々少屋ヲヤキ、三ノツキノ内一ツ居取ト云、或ハ二ト云篇々也。

木沢方ノ城大将右近カヲキニ江州カウカノモノ也云々。人数僅七、八十在之云々。弥勒ノタケヲモチテキル所ニ、彼山ニハ一向水無之間、経々程ヲ可落、竇川、少柳生僞トウラカヘルト云々。

筒井衆少々ウシロツメニ立チ了云々。事之様躰諸国相調、六角殿右京兆へ可有御合力之由一定く（後略）

*同月二十八日の条

於笠置有テ合戦、木沢方城ヨリ二手ニ作テ打出テ、悉ク以テ打殺、伊賀皆以退散了云々。人数卅人余打死云々、先以安堵了。

*天文一九年（一五五〇年）二月三日の条

笠置八講青源房ノ代リニ出了、中臈ハ順縁房迄也。

*天正三年（一五七五年）五月一六日の条

昨日ヨリ笠置ノツ、シ見ニ、常如院、清浄院、栄勝、良学同道ニテ被下处、一向花ハ無之、帰ニカモノ竹子見了、一段之見事了。

読み下し文

*天文一〇年（一五四二年）一月二十六日条

今朝伊賀衆笠置城へ忍ヒ入テ少々坊舎放火、其外所々少屋ヲヤキ、三ノツキノ内一ツ居取ト云、或ハ二ト云篇々也。

木沢方ノ城大将右近カヲキニ江州カウカノモノ也云々。人数僅七、八十在之云々。弥勒ノタケヲモチテキル所ニ、彼山ニハ一向水無之間、経ズ程ヲ可落、寶川、少柳生偽トウラカヘルト云々。

筒井衆少々ウシロツメニ立チ了ンヌト云々。事ノ様体諸国相イ調へ、六角殿右京兆へ可有御合力之由一定々々（後略）

*同月二十八日条

於笠置有テ合戦、木沢方城ヨリ二手ニ作テ打出テ、悉ク以テ打殺、伊賀皆以退散了云々。人数廿人余打死云々、先ズ以ッテ安堵シ了ンヌ。

*天文一九年（一五五〇年）二月三日の条

笠置八講青源房ノ代リニ出デ了ンヌ、中臈ハ順縁房迄也。

*天正三年（一五七五年）五月一六日の条

昨日ヨリ笠置ノツ、シ見ニ、常如院、清浄院、栄勝、良学同道ニテ被下处、一向花ハ之レ無ク、帰ニカモノ竹子ヲ見了ンヌ、一段ノ見事ニ了ンヌ。